

太気拳・意拳拳学研究会 佐藤聖二先生 ブログから。

【秘静克先生の文章】全 10 編

秘静克先生著『筆者学功時的事』 その1

2010-02-18 | 秘静克先生の文章



秘静克先生

秘静克先生は女性の意拳家で、50年代に王先生について養生を学ばれました。秘先生は83歳の時に《我向王向齋先生学站樁》という文章を発表しましたが、その数年後内容をやや訂正追加し著書《大成拳築基功》の中の《筆者学功時的事》として再度発表されました。

技撃だけでなく、養生功としての意拳(大成拳)の一面を理解されるのに役立つかと思いつてみました。尚、下記の文章は上記の二つの文章を合わせて意識しております。

秘静克学功時的事

『1954年、長年の夜間勤務が原因で、私は両眼の視神経系萎縮を患い、その為北京市内のいくつかの大きな病院で治療を受けていたが効果は上がらなかった。そして視力はどんどん弱まり、やがて左眼は、0.01、右眼は0.3まで落ち、仕事を止めて長期休暇をとらざるを得なかった。

1957年、偶然道で会った友人が、中山公園に行って站樁を試してみたらどうか、と私に勧めてきた。私は子供のころ武術を学んだことがあったので、練功と聞けば武術であり、身体を鍛え健康にはなるが、どうして病が治るのか？しかも私は眼の病気で

あるので、結局は行かなかった。後日この友人が家に来た時、練功状況はどうかと聞き、私が中山公園に行かなかったことを知ると、ぜひ試してみるべきだと根気強く勧めた。私は彼女の面子を気にして、仕方なく試してみることを了解した。

中山公園に行き、入り口の近くで掃除していた係員に、どこで站樁が行われているのか尋ねてみると、係員は竹箒を持ちながら手を挙げ、似ても似つかぬ站樁の真似事をしてみせ、「これを学びに来たのか？西北角海子の前でやっているよ。」と教えてくれた。しかし彼の姿はまるで日本軍が投降してきた様子にそっくりで、私はそれを見た瞬間、学ぶ気持ちもなくなりそのまま帰宅してしまった。

数日後、そのことを知った友人は怒り、「良薬は口に苦しと言うでしょう。格好が良いとか悪いとかは関係ないし、あなたは病院で見てもらっても治らず、他に方法がないのなら、だめでもともと、もしお金が無いのなら、学費くらい私が出してもいい。」と言った。

私は仕方なく再度中山公園を訪れ站樁をおこなっている場所を見たたん、驚いてぽかんとしてしまった。一体どこが治療なのか？そこには200人くらいの人達が立っていて、両手を挙げて胸の前に置き、人によって手の位置は高く、或いは低く、また腰に手を廻している人やいろいろな姿勢があり、それはまるでお寺の中にある十八羅漢像のようだった。

その中で70歳位の老人がときどき彼らの姿勢を調整していた。私は近くで学んでいた女性に尋ねてみると、彼女はあの方が王蕙齋先生だと言い、私を王先生のところに連れて行ってくれた。私は先生に眼の病状を話し站樁功を学びたいと言うと、先生は私に一つの姿勢をとらせてしばらく立っているように指示された。

(続く)

秘静克先生著『筆者学功時的事』 その2

2010-02-19 | 秘静克先生の文章

20分位経った頃、王先生がやって来て小さな声で、「あなたは眼が悪いので、流れを良くしておこう。」

と言われ、後ろから背中を触って何度か身体を調整してくれた。

(注：私が姚宗勲先生に学んでいた時も、暫く立っていると、先生が肩を上から下に撫ぜたり、背中と胸部を上から下に軽く叩かれ、強張った身体をほぐしてくれた。)

その時全身がとても軽くなったように感じ、そのまま続けて立ち、更に20分位経った頃、再び先生がやってきて同じように調整してくれた。この時はちょうど疲れを感じていた時で、先生が調整してくれると疲れがなくなり、また一回目よりも更にはっきりと身体が軽やかになった。それから更に15分が過ぎたころ、

「今日はこれくらいにしよう。」

と言われ、私はようやく站樁を終えた。

練功を終え帰宅する途中、いつものように太陽の日差しが眩しくて辛いことはなく、眼に力が戻ってきたような感じがあった。

50年代はまだ養生治療はまた社会的に広まって無く、一般人は養生術とは何のことなのか理解していなかった。故に私も一回の練功で、しかも先生は僅か私の身体を二度ほど触っただけで眼の病気に少し効果があったことは実に意外かつ不思議なことで、站樁に対する信頼感を持つどころか、反って誤解を生んでしまった。私は鬼神の類は信じていないが、印を結んで呪文を唱える巫術という言葉聞いたことがあり、ただそれがどんなものなのかは知らなかった。しかし先生が私にしてくれた二度の身体への調整は巫術のようなものなのだろう、と思い込んでしまった。

私はこれらの疑問を友人に伝えると、彼女はそれがなんであれ眼の痛みが取れて病気が良くなるなら続けるべきだと私を励まし、私もただ先生の言われた通り練習するしかなかった。先生がこのようにしなさいと教えれば、そのように練習し、一日三回立つように言われると、私もきちんとそれを守った。また私はもともと大人しい性格だったこともあり、練習に参加して間もなく、眼を閉じるとすぐに雑念が消え先生が言われた、“凝神、定意(注:精神を集中し、意を落ち着かせる)”の状態になり、眼の病気も少しずつ軽くなってきた。

それでもこのような治療方法と先生に対する疑問が消えることはなく、気分はすっきりしなかった。そこで長年先生について学んでいた先輩の劉さんという人に、先生は道教の方ですか？と聞いてみると、劉さんは私が何を考えているのかを察して笑いながら

「道教？いや道は道でも拳の道だよ。先生は拳学家だ。神や幽霊等の類は信じないし、邪教などの迷信も信じないよ。」

と教えてくれた。しかしそれでも私の疑問は消えず、ある日先生の奥様に会いに行くという口実を作って先生の家を訪問してみることにしたが、王先生の家の中には、仏像や神像などそれらしきものも置いている様子はなく、ようやく不安を解消することができた。

4ヵ月位過ぎると、全く思ってもみなかったことに左の視力は0.4、右の視力は0.9まで回復し、本を読み、字を書くこともできるようになっていて、職場にも復帰することができた。

(続く)

秘静克先生著『筆者学功時的事』 その3

2010-02-20 | 秘静克先生の文章

そして私は站樁が巫術、呪文の類ではなく、本当に病気を治すことができる功法なのだと思えるようになった。ただそれがどうして病気を治療できるのかは全くの謎であった。自分で何度も考えてみたが、私が通っていた病院はみな全国でも有名な一流の病院であったにもかかわらず治らなかった。站樁の練習は毎日ただ眼を閉じて立つだけで、先生が二度程身体の流れを調整してくれたが、それも練習を始めた頃の一ヶ月間だけで、その後はそれすらもなくなった。この謎は考えれば考えるほど分からなくなった。毎日夜勤の仕事を終えて、早朝の中山公園で練習した後、この謎を解決しようと先生にいろいろ質問を試みたが、何を聞いても先生は、

「あまり質問するな、あなたに説明してもわからない。とにかくそこで良く立ちなさい。」

と言うのみであり、また先生に説明されてもそれはまるで謎かけの様で、言われてもそれは人を悩ませるだけだった。

ある時、姐弟子の歩さんと楊さんの二人が推手の練習をしていたので、私も試しに一緒にやってみると、先生に見つかってしまい、

「あなたはここに何しに来ているのか？」

と言われた。私は、勿論眼の治療に来ています。しかしいろいろ学びたいのです、と答えた。すると先生は、

「眼はもう完全に良くなったのか？眼に功夫は備わったか？一緒に騒いでないで向こうで良く立っていなさい。」

と厳しく怒られた。私はへこたれず内心、また来たか、と思いながらも、眼に功夫があるとは一体何のことなのだろう？私にとってそれはとても新鮮な響きがあった。しかしそれ以上質問することもできず、言われた通り練習しようと站樁を続けるしかなかった。

数日後、先生がやって来て

「眼の功夫は備わったか？」

とまた聞くので私は、眼にも功夫が有るのですかと尋ねると、知らないのか？と逆に聞き返されてしまった。このとき先生は根気強く私に站樁功の功理を説明された。先生は、

「明日から毎朝眼を閉じ 30 分位站樁を行なった後、ゆっくりと眼を開いて、両眼はリラックスして前にある大きな木を見ながら練習するように。あなたの眼と木の枝葉から立ち上る大気が互いに繋がるまで練らなければならない。その時にやっと上乘功夫の扉をあけることができるのだ。」

と言われた。大気とは何ですか？と私が質問すると、先生は、

「木が吐き出す酸素である。」

と言われた。私は先生が何を言っているのか全く分からなかった。一体誰が木の吐き出す酸素など見ることができるだろうか？私の前にある大きな木を見てもどこにも大気など見えないし、眼が悪くなる以前もそんなものを見たことなど無く、でたらめなことを言うなと内心思った。

私は先生への疑問を姉弟子の歩毓坤さんに相談すると歩さんは、きっとあなたの眼を鍛練させるためでしょうと言い、私は遠くを見ることは眼の鍛錬になるが、なぜ私と木の葉から立ち上がる大気と互いに繋がらなければならないのか、あなたは木の枝葉から出る大気を見たことがあるかと聞いた。彼女は、私は見たことはないが、あなたも遠くを見ることは眼によいことだと知っているのだから、とりあえず続けてみたら？きっと先生には先生の道理が有るのでしょう。と言われた。私はこのような不信感を持ちながらも站樁の練習を続けていった。

(続き)

秘静克先生著『筆者学功時的事』 その4

2010-02-21 | 秘静克先生の文章

数ヶ月後、ある朝いつものように中山公園後海の水辺で眼を閉じ 30 分余り站樁を行なった後、ゆっくりと眼を開いて遠くの木の上を見ると、なんと先生の言うとおりの木の枝葉の上を厚い一層の気が覆っていた、しかしそれをどうやって眼と繋げるのだろうか？先生に尋ねてみると、

「眼でゆっくりと木の上にある大気を吸い込み、またそれを眼から放し戻すように練習しなさい。眼が引き寄せ放つ勁の感覚がでてくれば、練功の効果があつたということである。」

と言われた。これを信じてそのとおりに行なってみると、不思議にも先生の言われた感覚が徐々に現れた。更にしばらく続けるとついに眼と木の上の大気が繋がる感覚がでてきた。先生にそのことを報告すると、

「それはよかった。このままこの練習を続けるように。」

と、とても喜ばれていた。

(続く)

秘静克先生著『筆者学功時的事』 その5

2010-02-22 | 秘静克先生の文章

私と姉妹弟子の、歩毓坤さん、李淑珍さん、李明妹さんはとても中がよく、4人はいつも先生のことでぶつぶつ文句を言っていた。歩さんは、先生は保守的で何も教えてくれないと言い、私は、先生のぐちゃぐちゃした話は何を言っているのか全く理解でき

ないし、また私に対してはとても厳しく、毎日ただ馬鹿みたいに立たせるだけで、他には何もさせてくれず、推手をしたら怒られ、摩擦歩の練習をしても怒られたと言った。李明妹さんも、先生はとても変わり者で質問することさえも許さず、ひたすら立たせるだけだと言っていた。姐弟子の李淑珍さんは我々より一年余り長く学んでいたのも多くを理解しており、あなた達はなにも分かっていないが、先生はあなた達に時間的余裕がないことを気にしており、故に本当の功夫のための基礎を作る為あえて別のことをさせないのだと我々三人をとがめた。当時我々は李淑珍さんの言ったことが本当かどうか分からず、ただ我々に文句を言わせないためにこのように言っていたのだと思っていた。

その後、周りの兄弟弟子達が先生にお願いしてくれたおかげで、1959年私達は先生の正式弟子として入門を認められた。

この2年余り真面目に練習に取り組んだことで、私は身体内部の変化、例えば骨格や筋肉変位の大小、気感に触れる作用などに対しても一定の認識を持つようになった。先生が言われる功法も徐々に理解できるようになり、站樁は巫術の類でもなんでも無く、科学にもとづいた体育療法であることが理解できていた。そしてこの体育療法は、一般の体育運動のような激しい動作、骨格や筋肉の大きな変位や体力の消耗が大きいものとは異なり、一定の姿勢を保持し動かず、鈍角三角形の姿勢を以て支え、骨格筋を短く迅速な収縮拡張運動を促進し、静の中に動を生じ、動の中に静を養う、静動が結合し、しかもほとんど体力を消耗しない特殊な体育運動、内功であることがわかってきた。この種の鍛練は確かに先生の要求されるように「空洞忘我、天地合一」まで練習しなければならず、身体と大気を呼応させ、吸収能力を強化し空気中の栄養物質を大量に摂取し、体内の新陳代謝の活発化、並びに大量の熱エネルギー、力学的エネルギー、電気エネルギーの転化により、経絡の流れを疎通させ、不平衡の中の平衡を調整して、病気を治療することが目的であったのだ。この頃、私は先生に対する意見などなくなり練功法に対して疑いをもつどころか先生を大変敬服しており、厳しくひたすら立たせる指導に対して大変感謝をしていた。そして教えを守らずただ立つことだけに徹しなかった他の練習者より、私が体得したものの方が比較的多かった。

(続く)

秘静克先生著『筆者学功時的事』 その6

2010-02-23 | 秘静克先生の文章

そんなある日、私が練習しているところに先生が来て、引き続き“金剛指”を練るよう言われた。それは両腕でものを抱くような姿勢で、眼は遠くを望み、両手の人差し指が眉毛に引っかかっている様で、頭が後ろに僅かに傾いたり或は僅かに持上げた

りした時に人先指と引き合う様な力を感じ、そして站樁の練習していない時でもその力が保たれる様になれば功が成ったと言えるものであった。私はこの練功は私にとってとても役に立つものであると言うことがすぐ理解できた。それは先ず人指し指の力を練り、そして眼の周りの力を練り、更には視力を継続して練るものであった。以前のように病魔につきまとわれるのではなく、先生に練功を強制されるようになり、私は大変うれしく感じた。興味が益々湧いてきて練習時間も増え、毎朝一時間以上は立つようになった。この練習を始めたころ、最初は指先の感覚はあったが眉毛には感覚はなく、指も眉毛に引っかからなかった。そして半月後ようやく指が眉毛に引掛ったが、引合う力は小さく、或る時は力が途切れてしまった。一ヶ月が過ぎる頃やと先生の言われるような引き合う力が感じられ、また頭部の力は身体の力より早く現れた。そして先生に“金剛指”の練習状況を報告すると、先生は喜んで、

「これは正に災い転じて福となすだ。もしあなたの眼が病気でなかったら、眼の功夫を得ることは不可能だった、あそこにいる技撃を学びに来ている者たちもこれができず、養生を学びに来ている者達は更に駄目だ。あなたは技撃をやる必要はないだろうが、眼の養生には一生役立つはずだ。」

と言われた。もともと眼の功夫とは、技撃と密接な関係があった。拳術を学ぶには全身の僅かなところの力もみな試さなければならず、そうしてようやく敵に遭遇しても不敗の境地に至るのである。先生が私に“金剛指”の練習をさせたのは、正に眼と指先双方の試力であり、もしも眼の力が意に随い自由に出せるようになれば、双方打ち合いで避けることができない時も、眼の爆発力を運用して敵を迎え、眼球を保護し傷つけられずにすむ。先生は養生の学生に対して確かに独特のものがああり、眼の功生は私の一生に有益であるとはすぐれた見識であり経験から来たものである。私は既に94歳(注:2007年の時点)になったが、今迄かつての様に眼がかすんだり、ちらちらすることはない。私いろいろな人にこの“金剛指”の鍛練を尋ねてみたが、みな驚いて聞いたことがないと言っていた。私は本当に恵まれていると思った。

(続く)

秘静克先生著『筆者学功時的事』 その7

2010-02-24 | 秘静克先生の文章

先生はもともと私に推手、摩擦歩など技撃面の練習をおこなうことは許可してくれなかった。しかしこの時から積極的に李さん、歩さんと私に対して拳学の功理、功法を教えだし、試声の字音と発声、及び試力の鍵となる問題なども説明してくれた。

この頃先生は、

「畜力ができていないのに、推手をおこなうことはまったくの馬鹿騒ぎであり、時間を浪費するだけだ。推手は必ずや站樁で基礎を作り上げた後に試力をおこない、全身

各部の力が試すことができ、その後に推手模勁をおこなうのが近道なのだ。身体に功夫がないのに推手をおこなっても勁を模索すること、即ち相手の勁を理解し壊すことは難しい。更に相手を飛ばすことを考えるなどとんでもないことだ。自分の身体に功夫がないのに推手をおこなうことは、大きく回り道をする事だ。」

と言われていた。先生の話聞き、当時先生に対する誤解、不平不満を思い出し、また現在の我々に対する先生の誠意と忍耐強い指導に泣きたくなるくらい恥ずかしく、先生の教えに感謝した。大成拳站樁功は私の人生に大きな利益を与えてくれた。

(続く)

秘静克先生著『筆者学功時的事』 その8

2010-02-25 | 秘静克先生の文章

私の練習も成果が出てきた頃、先生も私に対して心配せず、あまり干渉もなくなってきた。私は自分の練習が終わると、ときどき技撃の練習をしている人達のところに見学しに行った。ある日二十何歳かの若者も来て推手の練習を見ていたが、先生がやって来て、練習は終わったのか？とたずねた。すると若者は、少し見てから練習します、と答えた。先生は若者の肩を叩きながら、

「こんなにスカスカな身体なのに、練習もしないでぶらぶらしてどうするのだ。」

と言われた。彼は眼を丸くして、

「先生、私の身体がスカスカだって？私は首都鉄鋼所で鉄の塊を運んでいる労働者ですよ。毎日180キロもある鉄塊を両手で持ち上げ肩に担ぎ、午前中だけで十数個も運ぶ仕事をしているんですよ。私の身体がスカスカならこんな仕事ができると思いますか？」

と言った。すると先生は、

「そうか、そんなに力があるのか。では私と腕相撲でもやってみるか？おまえの力を私に見せてくれ。」

と言われた。若者は180センチあり、腕は太く手も大きく、たくましい体格だった。彼は先生を見て、先生の腕はそんなに細いものだからやめましょう、と断った。しかし先生は、

「おお、私の腕が折れることを心配しているのか。ならばこうしよう。あなたの拳で私を推してみなさい。もし私が少しでも退いたなら私の負けだ。あなたの力を認めよう。」と言った。若者はそれを聞き、先生が彼の力を信じていないことに少し腹を立てた様子で、

「いいでしょう。しかし私が力を使って、先生がひっくり返って怪我をしたらどうします？」

と言り返した。先生の後立っていた先輩の劉さん達は、この若者の負けず嫌いな

様子を見て、

「大丈夫だ。先生の後ろには我々がいるから、先生が倒れそうになったら我々がちゃんと受け止めるよ。」

と口をはさんだ。すると彼は、ではどこを推したらよいですか？とたずね、先生は、あなたが選べ、と答えた。彼は先生の胸や腹のあたりをちょっと見ていたが、恐らく適当な個所を探していたのだろう。その後彼が拳を握り先生の腹部を推したが、先生はもっと力を使え、と言った。若者が力を入れると、先生はまた、そんな力じゃ駄目だ。もっと力を入れろと言ひ、更に続いて、

「力を入れたくないのなら、後にさがれ。」

と言って先生は歩きだした。すると彼は大人しくそのまま後退し、先生が更に進むと、彼は再び後ろへ下がった。このように若者が数歩下がったところで、先生は、

「もういい。おまえは既に額に汗をかいて腰も伸びは鼻息も弱々しい。」

と言ひ、若者もぼかんとした様子だった。先生はまた、

「私がおまえの身体はスカスカだと言ったが、おまえは認めなかった。しかしその大きな拳でも私を推すことができない。今度は私が二本の指でおまえを後ろに推してみろが、試してみるか？」

とたずねた。彼はまた負けん気が戻ったように、では試してみようと先生の誘いを受けた。彼は両足を開いて踏ん張ると、先生は人差し指と中指の二本の指を折り曲げ第二関節を突き出し彼の腹部を推し当て、準備はいいか？聞き、彼がどうぞと言うと、先生はまた、

「後にさがれ。」

と言うと、彼はそれに従うように後にさがった。更にまた下がれと言うと、また彼は後にさがった。先生は、

「まだ後に下がりたいか？」

と聞いたが、彼は顔を真っ赤にして、驚いた様子だった。先輩の劉さんが来て若者の肩を叩きながら、

「先生の言うことをよく聞いて向こうで練習してきなさい。」

と言った。

(続く)

秘静克先生著『筆者学功時的事』 その9

2010-02-26 | 秘静克先生の文章

私は子供のころより何かあるとその原因をとことん追求したくなる癖があった。先生と首都鋼鉄工場の青年との力比べは、私もとても驚いた。私は功理について既に少なからぬ理解があったが、あの立派な体格の青年が意外にも痩せこけた老人を推す

ことができず、しかもその老人に二本の指で推されて後ろに下がってしまったことは、一体どういう道理なのだろう？

翌日、この青年を掴まえていろいろ質問をしてみると、彼も劉という名前の 26 歳で、胃腸が悪くて站樁を学びに来たとのことだった。私はなぜ先生を推すことができなかったのか？を聞いたが、劉君は、

「私が力を入れれば入れるほど先生の腹が硬くなった。」

と言い、では先生が腹であなたを押し返した時はやはり腹が硬くなったのか？とまた聞くと、

「いや、先生が私を押し返してきた時は逆に硬く感じなかった。」

と答えた。硬くなかったなら何故力を入れて押し返さなかったのかたずねると、彼は、「力を入れて堪えたのだが、どういう訳か先生の“一步下がれ”の声に従うように下がらざるを得なかった。」

と答えた。そして先生が指の関節で推してきた時に下がってしまったことについては、「先生の指の骨はまるで鉄製の栓のようで、私の腹は栓でふさがれて対抗する力など出せなかった。」

と答えた。私はしばらく質問を続けたが結局よく分からず、数日後先輩の劉さんにあの時のことを聞いてみた。彼の拳功は深く、太極拳を 24 年、螳螂拳を 13 年ほど練り、その後大成拳に入門し王薊齋先生について学んだ人だった。劉さんは、

「あなたは先生の“平衡”という言葉聞いたことがあるか？」

と言われた。私は聞いたことはあるがどうということかわからないと答えたが、そのとき突然はっと悟った。あの力比で先生が用いた功力は、ほんの僅かの箇所も全て“平衡力”を掌握し勝ち取ったものであったと。先生の功理と熟練された功法運用の巧妙さには、甚だ感心させられた。

(続く)

秘静克先生著『筆者学功時的事』 その 10

2010-02-27 | 秘静克先生の文章

姐弟子の歩さんは性格のいい人で、誰が手を合わせようとしても断ることはなかった。ある日、趙という人が彼女と推手おこなったが、その時先生が突然さっとやってきて、歩さんを掴んで引っ張ると、相手の趙君はバツと音を立てて地面に倒れてしまった。歩さんは驚いて一体何がおったのか理解できなかった。先生は怒って歩さんに対し、

「あなたは誰とでも推手をするが、小趙は虎みたに威勢のいい人間だ。もし彼に怪我をさせられたらどうするのだ。」

と言い、更に振り向いて趙君に、

「お前は人を探してはすぐ推手をするが、人が相手をしてくれただけでも有難いと感謝しなければならないのに、更に人を推し飛ばそうとする。彼女は六十歳の女性だ。もし彼女を怪我させたらどう責任をとるつもりなのだ。」

と、怒られた。趙君は、私は力を使いません。ただ自分に爆発力があるかどうか試してみようと思っただけです、と答えたが、先生は、

「では力を使っていないのに、なぜおまえは地面に倒れたのだ？」

と問いただした。趙君は、先生が彼女をいきなり引っ張るから倒れてしまったのです、と答えた。我々は趙君が倒れた音を聞いて何が起こったのかと集まってきたが、この趙君の理屈を聞いて大笑いしながら、

「それは屁理屈と言うものだ。今日先生はあなた達二人を救ったのよ。歩さんを怪我から救ったし、趙君も加害者にしないように救ったの。あなた方は先生に感謝すべきだ。」

と言い、先生は怒ってその場を去ってしまった。

趙君が帰った後、私は歩さんに、彼があなたを飛ばそうとしたのに、なぜ避けようとしなかったのか？まさか反撃しようとも思っていたのか？と聞いてみたが、歩さんは、

「彼が私を推し飛ばそうとしていたなんて全く感じなかった。先生がいきなりサッとやって来て私をあそこまで引っ張り、私は一体何が起こったのかただ驚いた。先生に怒られた時、初めて趙君が私を推し飛ばそうとしていたこと、先生が私を救ってくれたことが分かったのよ。」

と言っていた。歩さんは楽天的な人で、事が過ぎると嬉しそうに、

「数年来、先生が言われる“超速運動”という言葉の意味がよく分からなかった。私も技撃を学びに来る人達の発力をよく見ていたが、それらを特別に早いと思ったことはなかったし、とても先生の言われる“超速運動”と呼べるものではなかった。しかし今日私は自ら先生の“超速運動”を体験できた。先生の動作の速さは閃電を超えるほどで、その眼付きも尖っていた。あの時我が全く感じる前に、先生は趙君が発力しようとしたことを見抜き、しかもあっという間に私を助けてくれた。本当に不思議な功夫であり、不思議な人だ。」

と言っていた。

趙君の地面に倒れた音があればほど激しかったことから推測すると、恐らく先生は歩さんを押しつけたのと同時に趙君の手を前に動かしたのではないだろうか？先生は趙君が手段を選ばずに人を推し飛ばそうとする行為に対し、意図的に行動を以て教えさとしたのだろう。先生が手を加えたかどうかにせよ、どのみち趙君は人を飛ばすことを理解しておらず、後争の力をよく把握できてないゆえに、あのようなひどい転び方をしたのだろう。

(完)

秘静克先生と王玉芳先生(王薊齋先生の次女)

